

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2019年11月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第7回仙台国際音楽コンクール

ピアノ部門:2019.5.25(土)~6.9(日) ヴァイオリン部門:2019.6.15(土)~6.30(日)

チェ・ヒョンロク インタビュー

(第7回仙台国際音楽コンクールピアノ部門優勝)

取材:高坂 はる香(音楽ライター)



—優勝から一夜明けて、今のご気分は？

昨夜は一睡もできませんでした。教授や友人たちからお祝いの連絡が来ていましたが、それでも優勝を現実と思えないまま過ごしました。ガラコンサートに参加して、ようやく少しずつ実感が湧いています。

—大変なコンクールの毎日を、何を目標すことで乗り越えたのでしょうか。

結果よりも、どれだけ音楽に集中できるかを明確な目標としました。自分自身との戦いだったと思います。集中して取り組む中で成長することができました。本当は仙台で観光や食べ歩きをしたかったのですが、全く心の余裕がなく、気づいたら、練習し、録音して聴いてはまた練習することを繰り返す毎日でした。

—ピアノはどのように始めましたか？

3歳上の姉が通うピアノ教室についていくうちに、僕も5歳で習うようになりました。ごく普通の街のピアノ教室です。聞くとところによると、姉はなかなか楽譜が読めるようにならないのに、僕は楽譜を見るとすぐに弾くことができたため、この子は伸びるだろうから指導したいと先生に言われたそうです。

—現在ザルツブルク・モーツァルテウムで師事するギリロフ先生からは、どんなことを学びましたか？

韓国で勉強していた時間のほうが長く、ギリロフ先生の元で学ぶようになってまだ1年半です。留学して、まず音楽に対する姿勢からして違うものを感じました。ギリロフ先生は、ピアノを演奏するのではなく音楽を演奏しなさい、ピアニストではなく音楽家になることを目指しなさいとおっしゃいました。それ以降、練習にあたって、音楽家として作品にどう向き合うかを意識するようになりました。

韓国で受けていた指導は、音楽の色を先生が決めて、それを教えてくれる形だったように思います。一方、ヨーロッパで受けている指導は、学生の想いを羽ばたかせるものだと感じます。

—先生の言葉を受け、練習への意識が変わったことで、見えたことや変化したことはありますか？

今はまだ、答えを求める試行錯誤の最中です。先生の指導が意味することを見出すため、戦っています。自分は何のために音楽をやっているのか、何を成し遂げようとしているのかを自問していますね。

そんな中で思い出すのは、音楽を始めたときのことです。仲間たちを見ていると、良い結果を出そうとコンクールに挑戦し続ける中で、心が疲弊してきている人もたくさんいます。僕自身もだんだんそうになっていって、あれほど好きで音楽を始めたというのに、本来の心が失われているかもしれない気がしてきました。

自分がなぜ音楽をやりたいと思ったのか、その最初の気持ちを思い出すことで見えるものがあると今は思っています。

—ベートーヴェン、モーツァルト、チャイコフスキーという3つの協奏曲の中で、一番よく弾けたと感じるものは？

“ゼンブナイ! ”。終演後、YouTubeで自分の演奏を聴きましたが、どれも出来は良くなかったと思います……。特にベートーヴェンは、最初の演目だったことと、ベートーヴェンへの尊敬とこの神聖な作品を弾くことへの恐れ多さから、とても緊張してしまいました。舞台から降りる時の僕の表情は、きっと良くなかったのではないかと思います。でも、みなさんから良かったと声をかけていただいて、ようやく、自分が表現したいことを出せたかもしれないと思えました。

モーツァルトは2曲目だったのでそれほど緊張することなく、かわいらしい演奏を目指すことができました。好きな曲だったこともあり、いい気分で本番に臨めました。

チャイコフスキーは、これほど大規模な曲をオーケストラと演奏するのは初めてでしたから、リハーサルで演奏が始まった瞬間、これから本当にこの曲を演奏するのだと鳥肌が立ちました。実際に弾いてみて、よりダイナミックな表現が求められる難しい曲だということを改めて感じ、もっと勉強しなくてはならないと思いました。

—好きなピアニストは誰ですか？

それぞれに個性があるので、好きなピアニストはたくさんいます。自分の好みもだんだんと変わっていると感じています。でもすぐに思い浮かぶのは、マリア・ジョアン・ピリスと、クリスチャン・ツィメルマンです。

—それでは、どんなピアノをいいピアノだと感じますか？

“ワカラナイ! ”。非常に難しい質問です。でも、どんなに悪いピアノでもそれを良いピアノにすることは、演奏者の責任だと思います。

シャノン・リー インタビュー

〈第7回仙台国際音楽コンクールヴァイオリン部門最高位(第2位)〉

取材:片桐 卓也(音楽ライター)



—ヴァイオリンを始め たきっかけは？

父親は香港出身で、母親はカナダのモントリオール出身です。ふたりはモントリオールで出会い、私はトロントで生まれました。そして父の仕事の関係で、2歳でテキサスに移りました。母は音楽好きだったので、私に何か楽器を学ばせたいと考え、まず私はピアノを習い始めました。しかし、私の手が小さかったので、ピアノの

先生が近所のヴァイオリンの教室を薦めてくれました。目から鱗のような感じでヴァイオリンに目覚め、通うようになりました。そこがスズキ・メソッドの教室でしたが、さらに大きなスズキ・メソッドの学校に移り、合奏やサマー・キャンプなどに参加しました。他のヴァイオリンを学ぶ子たちと刺激し合い、よりヴァイオリンに集中するようになりました。

—コロンビア大学に進まれ、コンピュータ・サイエンスを学ばれたそうですね。

両親はふたりともエンジニアだったので、コンピュータ・サイエンスはとて面白いものでした。それでコロンビア大学でそれを専攻することにしましたが、4年生になった頃からもっと音楽に集中したいと考えるようになりました。

—今年はたくさんのコンクールがあった訳ですが、その中から仙台のコンクールを選んだ理由は？

昨年9月ぐらいから多くのコンクールを受けようと考えていました。そしてまずインディアナポリスのコンクールを受けました。コンクールには年齢制限もあるので、とにかくチャンスを活かしたいと思いました。今年はエリーザベト王妃、モントリオール、マイケル・ヒル(ニュージーランド)、そして仙台のコンクールが可能性としてありましたが、エリーザベト王妃で第4位に入ったことで、その後に仙台に参加するのがパーフェクトなタイミングでした。また先生が「仙台の課題曲はとて素晴らしい。コンサートマスターの課題もあるし、ソロの課題曲もたくさんある」と薦めてくれましたし、私にとっても好きな課題曲が多かったのが理由です。

—ファイナルでチャイコフスキーを選択されました。エリーザベト王妃と同じ作品を選んだ理由は？

エリーザベト王妃コンクールはファイナルの前の1週間、外界と隔離されて、インターネットにも接続出来ないような状況の中で練習します。チャイコフスキーの協奏曲は15歳ぐらいから弾いていなかったのですが、その1週間で集中して練習しました。そして本選の舞台では、久しぶりにたくさんの人と出会えたというワクワク感がありました。エリーザベト王妃の時に、審査員の方々からも様々な言葉を頂いたもので、それも参考にしながら、仙台では演奏しようと考えました。第2楽章はよりシンプルに、そしてオーケストラとのアンサンブルをもっと意識しようと考えて演奏しました。

—セミファイナルで演奏されたバルトークの協奏曲第2番は審査員からも高く評価されていました。

最初に取り組んだのは17歳の時だったと思います。テキサス州のダラス交響楽団のメンバーでもあったジャン・スローマン先生が薦めてくれました。そして、アイザック・スターンがバーンスタイン指揮のニューヨーク・フィルと共演した録音をよく聴いていました。オーケストラとのやり取りが興味深く、ハンガリーの民俗音楽や言語からの影響もたくさん感じさせてくれ、とてワクワクする作品だと思えます。

—コンサートマスターの課題はいかがでしたか。

コンサートマスターの課題としてはとて有名なもので、多くのオーケストラにエキスパートが居るので、それらを聴くという形で準備をしました。作品のコンセプトを知ろうと思いましたが、特にボストン交響楽団のコンサートマスターの演奏に多くのヒントを得たと思います。

—6月30日が誕生日だそうですね。

ガラコンサートのリハーサルをしていた時に、突然ハーブが二長調で「Happy Birthday」を演奏し始めて、バルトークに集中しようと思っていたのでびっくりしました。でも、このコンクールの結果はとて素敵なバースデー・プレゼントとなりました。

—コンクール期間中に考えていたことは？

日本に来るのが初めてだったので、日本の文化について深く知りたいと思っていました。滞在中に特に興味を持ったのは日本の券売機(チケット・マシーン)です。アメリカには無いもので、とて便利だと思いました(笑)。練習は夕方までなので、多くのコンテストと話す時間を持つことが出来たのも、仙台での貴重な体験でした。

【速報】2020年6月第7回コンクール最高位受賞記念リサイタルを開催します。

2020年6月、第7回仙台国際音楽コンクール最高位入賞者のリサイタルを仙台・東京で開催します。チケットは2020年2月上旬一般発売予定です。詳細は、後日公式サイト(<https://simc.jp>)にてお知らせします。



SENDAI
INTERNATIONAL
MUSIC
COMPETITION

■お問い合わせ先/公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel: 022-727-1872 Fax: 022-727-1873 E-mail: info@simc.jp URL: <https://simc.jp>